



2023年2月期 第3四半期決算短信〔日本基準〕(非連結)

2023年1月13日

上場会社名 サインポスト株式会社 上場取引所 東
 コード番号 3996 URL https://signpost.co.jp/
 代表者 (役職名) 代表取締役社長 (氏名) 蒲原 寧
 問合せ先責任者 (役職名) 常務取締役コーポレート本部長 (氏名) 西島 雄一 (TEL) 03-5652-6031
 四半期報告書提出予定日 2023年1月13日 配当支払開始予定日 —
 四半期決算補足説明資料作成の有無 : 無
 四半期決算説明会開催の有無 : 無

(百万円未満切捨て)

1. 2023年2月期第3四半期の業績 (2022年3月1日~2022年11月30日)

(1) 経営成績(累計) (%表示は、対前年同四半期増減率)

	売上高		営業利益		経常利益		四半期純利益	
	百万円	%	百万円	%	百万円	%	百万円	%
2023年2月期第3四半期	1,922	25.8	△79	—	△87	—	△99	—
2022年2月期第3四半期	1,528	△0.8	△337	—	△341	—	△481	—
	1株当たり 四半期純利益		潜在株式調整後 1株当たり 四半期純利益					
	円 銭		円 銭					
2023年2月期第3四半期	△7.78		—					
2022年2月期第3四半期	△38.16		—					

(注) 潜在株式調整後1株当たり四半期純利益については、潜在株式は存在するものの、1株当たり四半期純損失であるため、記載しておりません。

(2) 財政状態

	総資産	純資産	自己資本比率
	百万円	百万円	%
2023年2月期第3四半期	2,515	1,449	57.6
2022年2月期	2,300	1,539	66.9

(参考) 自己資本 2023年2月期第3四半期 1,449百万円 2022年2月期 1,539百万円

2. 配当の状況

	年間配当金				
	第1四半期末	第2四半期末	第3四半期末	期末	合計
	円 銭	円 銭	円 銭	円 銭	円 銭
2022年2月期	—	0.00	—	0.00	0.00
2023年2月期	—	0.00	—	—	—
2023年2月期(予想)	—	—	—	0.00	0.00

(注) 直近に公表されている配当予想からの修正の有無 : 無

3. 2023年2月期の業績予想 (2022年3月1日~2023年2月28日)

(%表示は、対前期増減率)

	売上高		営業利益		経常利益		当期純利益		1株当たり 当期純利益
	百万円	%	百万円	%	百万円	%	百万円	%	円 銭
通期	2,580	—	△90	—	△99	—	△112	—	△8.77

(注) 1. 直近に公表されている業績予想からの修正の有無 : 有

2. 2023年2月期の期首より「収益認識に関する会計基準」(企業会計基準第29号)等を適用し、上記の業績予想は当該基準等を適用した後の金額となっており、対前期増減率は記載しておりません。

3. 1株当たり当期純利益は、新株予約権の行使による増加見込み株式数を反映しておりません。

※ 注記事項

(1) 四半期財務諸表の作成に特有の会計処理の適用 : 有

(注) 詳細は、添付資料7ページ「2. 四半期財務諸表及び主な注記 (3)四半期財務諸表に関する注記事項 (四半期財務諸表作成に特有の会計処理の適用)」をご覧ください。

(2) 会計方針の変更・会計上の見積りの変更・修正再表示

① 会計基準等の改正に伴う会計方針の変更 : 有

② ①以外の会計方針の変更 : 無

③ 会計上の見積りの変更 : 無

④ 修正再表示 : 無

(注) 詳細は、添付資料7ページ「2. 四半期財務諸表及び主な注記 (3)四半期財務諸表に関する注記事項 (会計方針の変更)」をご覧ください。

(3) 発行済株式数 (普通株式)

① 期末発行済株式数 (自己株式を含む)

2023年2月期3Q	12,780,195株	2022年2月期	12,767,671株
2023年2月期3Q	3,211株	2022年2月期	一株
2023年2月期3Q	12,773,790株	2022年2月期3Q	12,612,700株

② 期末自己株式数

③ 期中平均株式数 (四半期累計)

※ 四半期決算短信は公認会計士又は監査法人の四半期レビューの対象外です

※ 業績予想の適切な利用に関する説明、その他特記事項

(将来に関する記述等についてのご注意)

本資料に記載されている業績見通し等の将来に関する記述は、当社が現在入手している情報及び合理的であると判断する一定の前提に基づいており、その達成を当社として約束する趣旨のものではありません。また、実際の業績等は様々な要因により大きく異なる可能性があります。

業績予想の前提となる条件及び業績予想のご利用にあたっての注意事項等については、添付資料4ページ「1. 当四半期決算に関する定性的情報 (3)業績予想などの将来予測情報に関する説明」をご覧ください。

○添付資料の目次

1. 当四半期決算に関する定性的情報	2
(1) 経営成績に関する説明	2
(2) 財政状態に関する説明	3
(3) 業績予想などの将来予測情報に関する説明	4
2. 四半期財務諸表及び主な注記	5
(1) 四半期貸借対照表	5
(2) 四半期損益計算書	6
(3) 四半期財務諸表に関する注記事項	7
(継続企業の前提に関する注記)	7
(株主資本の金額に著しい変動があった場合の注記)	7
(四半期財務諸表の作成に特有の会計処理の適用)	7
(会計方針の変更)	7
(セグメント情報等)	8
3. その他	10
継続企業の前提に関する重要事象等	10

1. 当四半期決算に関する定性的情報

第1四半期会計期間の期首より、「収益認識に関する会計基準」(企業会計基準第29号 2020年3月31日。以下「収益認識会計基準」という。)等を適用しておりますが、前年同四半期及び前事業年度末との比較は、当該会計基準等の適用前の前第3四半期累計期間及び前事業年度末の数値を用いております。詳細は、7ページ「2. 四半期財務諸表及び主な注記(3) 四半期財務諸表に関する注記事項(会計方針の変更)」をご参照ください。

(1) 経営成績に関する説明

当第3四半期累計期間におけるわが国経済は、新型コロナウイルス感染症の感染拡大の影響があったものの、持ち直しの動きが続きました。一方で、急激な為替変動、エネルギー価格や原材料価格の高騰に起因する物価上昇等の要因により企業収益や個人消費の動向に注意が必要な状況が続いています。

当社がコンサルティングサービスを提供する金融業界では、コロナ禍による資金需要の高まり等により本業の収益が堅調なもの、不良債権増加の懸念や世界各国の金利政策変更に起因する金融市場の急変動等が経営に影響を及ぼす懸念が高まりつつあります。そのような中、金融各社は、コスト削減や手数料の適正化を進めると同時に、収益源の多角化をねらい経営コンサルティングやベンチャー企業の育成支援等を強化しています。イノベーション事業の製品・サービスの主要な提供先である小売業界では、社会経済活動が正常化に向かうにつれて人手不足への対応や業務効率向上の取り組みが活発になっています。第1四半期会計期間に新たに事業セグメントに追加したDX・地方共創事業は、創業理念「孫の代まで豊かな社会を創る一翼を担う」の下、中小企業・個人事業者を中心に経営課題や業務課題を解決して生産性を向上する製品・サービスを提供しています。これらの企業等においては、経済環境や経営環境にかかわらず効率化や新ビジネスの創出に寄与する技術やソリューションに強いニーズがあります。

このような環境の中、コンサルティング事業では、課題解決力を強化するとともにコンサルティングサービスの質と付加価値の向上をねらい、ソリューション事業を担っていた部門の機能をコンサルティング事業傘下の各部に統合しました。これにより、コンサルティングサービスとソリューションを柔軟に組み合わせ、お客さまの課題に対してより多様な解決策をスピーディーに提示することが可能となりました。イノベーション事業では、一度に複数の書籍のバーコードの読み取りが可能なセルフレジ「ワンダーレジ-BOOK」と低価格なコンパクトPOSセルフレジ「EZレジ」(イージーレジ)の拡販に取り組んでまいりました。DX・地方共創事業では、オープンイノベーションを通じて顧客ニーズと課題に沿ったソリューションの開発と情報収集に取り組んでまいりました。また、株式会社大分銀行及び大分県の地域商社の株式会社Oita Madeと業務提携し、販路の拡大に取り組みました。

関連会社の株式会社TOUCH TO GO(以下「TTG」という。)は、無人決済システム「TTG-SENSE」と規格化を進めた「TTG-SENSE MICRO」等の製品の拡販とともに、改良とコスト低減に取り組みました。

以上の結果、当第3四半期累計期間における経営成績は、売上高は1,922百万円(前年同四半期比25.8%増)となりました。利益面では、増収により売上総利益が増加したことや研究開発費及び人材採用費の減少を主因に販売費及び一般管理費が減少したこと等により営業損失79百万円(前年同四半期は営業損失337百万円)、経常損失87百万円(前年同四半期は経常損失341百万円)、四半期純損失99百万円(前年同四半期は四半期純損失481百万円)となりました。

なお、収益認識会計基準等の適用により、当第3四半期累計期間の売上高が14百万円増加し、営業損失及び経常損失がそれぞれ6百万円減少しています。

セグメントの経営成績を示すと、次のとおりであります。

なお、第1四半期会計期間より報告セグメントとして記載する事業セグメントを変更しており、当第3四半期累計期間の比較・分析は、変更後の区分に基づいています。

(コンサルティング事業)

前期に新設した部門において、期初から受注が堅調に推移しました。また、既存得意先の基幹システムの更改・統合のプロジェクトマネジメント支援やIT部門のプロジェクト推進の支援業務も中途採用者の増加等を主因に堅調に推移しました。これらの結果、売上高は1,825百万円(前年同四半期比20.3%増)、セグメント利益は274百万円(前年同四半期比37.8%増)となりました。

なお、収益認識会計基準等の適用により、当第3四半期累計期間の売上高及びセグメント利益がそれぞれ0百万円減少しています。

(イノベーション事業)

職域売店や社員食堂の精算業務の用途等でEZレジの販売数が増加しました。また、ワンダーレジ-BOOKが実証実験として設置していた2社の店舗で正式採用されました。これらの他、新規顧客から店舗ソリューションの開発を受託したほか、TTG-SENSE等の無人決済システムの設置が増加したことでロイヤリティの受け取りが増加しました。研究開発活動については、主に顧客ニーズに合わせた製品の改良に取り組みました。これらの結果、売上高は87百万円(前年同四半期比746.4%増)、セグメント損失121百万円(前年同四半期はセグメント損失265百万円)となりました。

なお、収益認識会計基準等の適用により、当第3四半期累計期間の売上高が15百万円増加し、セグメント損失が7百万円減少しています。

(DX・地方共創事業)

地域経済の持続可能性を高めることを目的に当社のDX技術やノウハウを活用したビジネスモデルの構築に取り組んでいます。また、当社の地方共創への姿勢に賛同する企業を拡大し、それらの企業とともに地域の経営・業務課題を解決する態勢構築に取り組んでまいりました。この成果としてBtoB向けのオンラインマーケットプレイスへの決済機能導入に関するコンサルティングサービスを提供したほか、食品ロスを低減する製品を販売しました。これらの結果、売上高は8百万円、セグメント損失は49百万円となりました。

なお、収益認識会計基準等の適用による影響はありません。

(2) 財政状態に関する説明

(資産)

資産合計は2,515百万円となり、前事業年度末と比べて214百万円増加しました。

流動資産は1,913百万円となり、前事業年度末と比べて214百万円増加しました。これは主に借入金の返済や運転資金の支出があった一方で、社債を300百万円発行したこと等により現金及び預金が56百万円増加したことや原材料及び貯蔵品が23百万円並びに売掛金が増加したこと等によるものであります。

固定資産は601百万円となり、前事業年度末と比べて0百万円増加しました。

(負債)

負債合計は1,065百万円となり、前事業年度末と比べて304百万円増加しました。

流動負債は620百万円となり、前事業年度末と比べて126百万円増加しました。これは主に社債の発行により1年内返済予定の社債が60百万円及び賞与引当金が59百万円増加したこと等によるものであります。

固定負債は444百万円となり、前事業年度末と比べて177百万円増加しました。これは主に長期借入金が55百万円減少した一方で、社債が220百万円増加したこと等によるものであります。

(純資産)

純資産合計は1,449百万円となり、前事業年度末と比べて89百万円減少しました。これは主に四半期純損失99百万円の計上により利益剰余金が減少した一方で、資本金及び資本剰余金がそれぞれ5百万円増加したこと等によるものであります。

(3) 業績予想などの将来予測情報に関する説明

2023年2月期の通期の業績予想につきましては、当第3四半期累計期間における業績の進捗及び営業活動の状況を踏まえて、2022年4月14日に公表した業績予想を次のとおり修正し、本日(2023年1月13日)、「業績予想の修正に関するお知らせ」を公表しています。

① 2023年2月期通期の業績予想値の修正(2022年3月1日～2023年2月28日)

	売上高 (百万円)	営業利益 (百万円)	経常利益 (百万円)	当期純利益 (百万円)	1株当たり 当期純利益 (円)
2022年4月14日発表 業績予想値(A)	2,893	26	22	16	1.25
2023年1月13日発表 業績予想値(B)	2,580	△90	△99	△112	△8.77
増減額(B-A)	△313	△116	△121	△128	
増減率(%)	△10.2	—	—	—	
(ご参考)前期実績 (2022年2月期)	2,119	△378	△382	△291	△23.08

② 修正理由

2023年2月期第3四半期累計期間における業績の進捗及び営業活動の状況を踏まえて、通期の売上高の見通しを313百万円下方修正しました。利益面では、販売費及び一般管理費の削減に努めているものの、減収による売上総利益の減少の影響が大きいことにより、営業損失、経常損失及び当期純損失を計上する見込みです。

主な減収要因は、次のとおりであります。

(コンサルティング事業)

金融業界において勘定系システムの更改・統合及びIT化推進等のIT関連投資は活発な状況が続いており、当社のプロジェクトマネジメント支援等のコンサルティングサービスに対しても、来期以降も高水準の需要がある見込みです。一方で、IT人材の不足と獲得競争が一段と深刻になっており、今期は需要に対して十分な要員を充足することができませんでした。これらの結果、売上高が当初の計画に比べておよそ72百万円下回ることとなりました。

(イノベーション事業)

書店向けセルフレジ「ワンダーレジ-BOOK」について、得意先の事情及び営業状況を踏まえて販売計画を見直した結果、今期中に見込んでいた販売が来期に後ずれすることとなりました。加えて、店舗ソリューションの受託開発が得意先の都合により中断されたこと等の減収要因がありました。これらの結果、売上高が当初の計画に比べておよそ182百万円下回ることとなりました。

(DX・地方共創事業)

事業は進捗しているものの、足元の営業状況を踏まえて売上高を59百万円下方修正しました。

③ 売上高及び営業利益の推移

6か月毎の売上高及び営業損益の推移

	前期(2022年2月期)		当期(2023年2月期)	
	第1・第2四半期 (3月～8月)	第3・第4四半期 (9月～2月)	第1・第2四半期 (3月～8月)	第3・第4四半期 (9月～2月)
売上高(百万円)	967	1,151	1,266	1,313 (計画値)
営業利益(百万円)	△263	△115	△52	△37 (計画値)

今期からは、前期までに蒔いた成長の種の収穫を始める年と位置づけており、売上高は増加、また営業損益は改善を続けています。通期では、売上高は前期に比べて460百万円増加の2,580百万円、営業損失は前期に比べて288百万円減少の90百万円となる見込みです。

2. 四半期財務諸表及び主な注記

(1) 四半期貸借対照表

(単位：千円)

	前事業年度 (2022年2月28日)	当第3四半期会計期間 (2022年11月30日)
資産の部		
流動資産		
現金及び預金	1,342,152	1,398,197
売掛金	278,063	-
売掛金及び契約資産	-	422,969
製品	606	1,015
仕掛品	5,043	6,507
原材料及び貯蔵品	12,800	36,416
その他	61,290	49,257
貸倒引当金	△395	△445
流動資産合計	1,699,562	1,913,917
固定資産		
有形固定資産	0	0
無形固定資産	0	0
投資その他の資産		
関係会社株式	541,950	541,950
その他	58,780	59,418
投資その他の資産合計	600,730	601,368
固定資産合計	600,730	601,368
資産合計	2,300,292	2,515,286
負債の部		
流動負債		
買掛金	152,340	164,103
1年内償還予定の社債	20,000	80,000
1年内返済予定の長期借入金	74,300	74,300
未払法人税等	18,572	10,945
賞与引当金	104,628	164,298
その他	124,157	127,185
流動負債合計	493,999	620,832
固定負債		
社債	30,000	250,000
長期借入金	138,747	83,022
退職給付引当金	85,165	98,559
資産除去債務	13,017	13,085
固定負債合計	266,930	444,667
負債合計	760,930	1,065,499
純資産の部		
株主資本		
資本金	1,176,078	1,181,103
資本剰余金	1,095,018	1,100,043
利益剰余金	△731,735	△830,412
自己株式	-	△947
株主資本合計	1,539,362	1,449,786
純資産合計	1,539,362	1,449,786
負債純資産合計	2,300,292	2,515,286

(2) 四半期損益計算書

第3四半期累計期間

(単位：千円)

	前第3四半期累計期間 (自2021年3月1日 至2021年11月30日)	当第3四半期累計期間 (自2022年3月1日 至2022年11月30日)
売上高	1,528,352	1,922,022
売上原価	1,117,296	1,368,353
売上総利益	411,056	553,668
販売費及び一般管理費	748,523	633,301
営業損失(△)	△337,467	△79,632
営業外収益		
受取利息	7	6
受取保険金	460	-
その他	94	48
営業外収益合計	562	55
営業外費用		
支払利息	1,758	1,898
株式交付費	2,708	218
社債発行費	-	5,724
その他	56	144
営業外費用合計	4,523	7,986
経常損失(△)	△341,428	△87,564
特別利益		
補助金収入	1,196	-
特別利益合計	1,196	-
特別損失		
減損損失	137,523	8,316
特別損失合計	137,523	8,316
税引前四半期純損失(△)	△477,755	△95,880
法人税等	3,548	3,548
四半期純損失(△)	△481,304	△99,428

(3) 四半期財務諸表に関する注記事項

(継続企業の前提に関する注記)

該当事項はありません。

(株主資本の金額に著しい変動があった場合の注記)

該当事項はありません。

(四半期財務諸表の作成に特有の会計処理の適用)

(税金費用の計算)

税金費用については、当第3四半期会計期間を含む事業年度の税引前当期純利益に対する税効果会計適用後の実効税率を合理的に見積り、税引前四半期純損益に当該見積実効税率を乗じて計算しております。ただし、当該見積実効税率を用いて税金費用を計算すると著しく合理性を欠く結果となる場合には、法定実効税率を使用しております。

(会計方針の変更)

(収益認識に関する会計基準等の適用)

「収益認識に関する会計基準」(企業会計基準第29号 2020年3月31日。以下「収益認識会計基準」という。)等を第1四半期会計期間の期首から適用し、約束した財又はサービスの支配が顧客に移転した時点で、当該財又はサービスと交換に受け取ると見込まれる金額で収益を認識することといたしました。これにより、準委任契約の一部の取引について、従来は一時点で充足される履行義務として収益を認識しておりましたが、一定の期間にわたり充足される履行義務として判断し、進捗率に応じた収益を認識する方法に変更しております。

収益認識会計基準等の適用については、収益認識会計基準第84項ただし書きに定める経過的な取扱いに従っており、第1四半期会計期間の期首より前に新たな会計方針を遡及適用した場合の累積的影響額を第1四半期会計期間の期首の利益剰余金に加減し、当該期首残高から新たな会計方針を適用しております。

この結果、当第3四半期累計期間の売上高は14,850千円増加、売上原価は8,127千円増加し、営業損失、経常損失及び税引前四半期純損失はそれぞれ6,722千円減少しております。また、利益剰余金の当期首残高は751千円増加しております。

収益認識会計基準等を適用したため、前事業年度の貸借対照表において「流動資産」に表示していた「売掛金」は、第1四半期会計期間より「売掛金及び契約資産」に含めて表示することとしました。なお、収益認識会計基準第89-2項に定める経過的な取扱いに従って、前事業年度について新たな表示方法により組替えを行っておりません。さらに、「四半期財務諸表に関する会計基準」(企業会計基準第12号 2020年3月31日)第28-15項に定める経過的な取扱いに従って、前第3四半期累計期間に係る顧客との契約から生じる収益を分解した情報を記載しておりません。

(時価の算定に関する会計基準等の適用)

「時価の算定に関する会計基準」(企業会計基準第30号 2019年7月4日。以下「時価算定会計基準」という。)等を第1四半期会計期間の期首から適用し、時価算定会計基準第19項及び「金融商品に関する会計基準」(企業会計基準第10号 2019年7月4日)第44-2項に定める経過的な取扱いに従って、時価算定会計基準等が定める新たな会計方針を、将来にわたって適用することとしております。なお、四半期財務諸表に与える影響はありません。

(セグメント情報等)

【セグメント情報】

I 前第3四半期累計期間(自 2021年3月1日 至 2021年11月30日)

1. 報告セグメントごとの売上高及び利益又は損失の金額に関する情報

(単位：千円)

	報告セグメント				調整額 (注) 1	四半期損益計算 書計上額 (注) 2
	コンサルティング事業	イノベーション事業	DX・地方共創事業	計		
売上高						
外部顧客への売上高	1,517,998	10,354	—	1,528,352	—	1,528,352
セグメント間の内部売上高 又は振替高	—	—	—	—	—	—
計	1,517,998	10,354	—	1,528,352	—	1,528,352
セグメント利益又は損失(△)	199,020	△265,178	—	△66,158	△271,308	△337,467

(注) 1. セグメント利益又は損失(△)の調整額△271,308千円は、各報告セグメントに配分していない全社費用等です。全社費用は、主に報告セグメントに帰属しない一般管理費であります。

2. セグメント利益又は損失(△)は、四半期損益計算書の営業損失と調整を行っております。

2. 報告セグメントごとの固定資産の減損損失又はのれん等に関する情報

(固定資産に係る重要な減損損失)

コンサルティング事業、イノベーション事業及び報告セグメントに配分していない全社資産において、帳簿価額を回収可能価額まで減額した結果、コンサルティング事業において116,304千円、イノベーション事業において6,458千円及び報告セグメントに配分していない全社資産において14,761千円を減損損失に計上しております。なお、当第3四半期累計期間における減損損失の計上額は137,523千円であります。

II 当第3四半期累計期間(自 2022年3月1日 至 2022年11月30日)

1. 報告セグメントごとの売上高及び利益又は損失の金額に関する情報並びに収益の分解情報

(単位：千円)

	報告セグメント				調整額 (注) 1	四半期損益計算 書計上額 (注) 2
	コンサルティング事業	イノベーション事業	DX・地方共創事業	計		
売上高						
顧客との契約から生じる 収益	1,825,460	84,191	8,918	1,918,570	—	1,918,570
その他の収益	—	3,451	—	3,451	—	3,451
外部顧客への売上高	1,825,460	87,643	8,918	1,922,022	—	1,922,022
セグメント間の内部売上高 又は振替高	—	—	—	—	—	—
計	1,825,460	87,643	8,918	1,922,022	—	1,922,022
セグメント利益又は損失(△)	274,258	△121,766	△49,456	103,035	△182,667	△79,632

(注) 1. セグメント利益又は損失(△)の調整額△182,667千円は、各報告セグメントに配分していない全社費用等です。全社費用は、主に報告セグメントに帰属しない一般管理費であります。

2. セグメント利益又は損失(△)は、四半期損益計算書の営業損失と調整を行っております。

2. 報告セグメントの変更等に関する事項

(報告セグメント区分の変更)

当社は、DXに関する技術やノウハウの事業化及びオープンイノベーションを通じた事業創出並びにこれらの推進力の強化を目的に、2022年3月1日に「DX・地方共創事業部」を新設しました。また、課題解決の提案力を強化するとともにコンサルティングサービスやソリューションの質と付加価値の向上をねらい、ソリューション事業の中核を担っていた部門の機能をコンサルティング事業に統合することとしました。

この組織変更に伴い「コンサルティング事業」、「ソリューション事業」及び「イノベーション事業」としていた報告セグメントを、第1四半期会計期間より「コンサルティング事業」、「イノベーション事業」及び「DX・地方共創事業」に変更することとしました。

なお、前第3四半期累計期間のセグメント情報については、変更後の区分方法により作成したものを記載しております。

(収益認識に関する会計基準等の適用)

(会計方針の変更)に記載のとおり、第1四半期会計期間の期首から収益認識会計基準等を適用し、収益認識に関する会計処理方法を変更したため、事業セグメントの利益又は損失の算定方法を同様に変更しております。

当該変更により、従来の方法と比べて、当第3四半期累計期間の「コンサルティング事業」の売上高及びセグメント利益がそれぞれ926千円減少、「イノベーション事業」の売上高が15,777千円増加し、セグメント損失が7,649千円減少しております。

3. その他

継続企業の前提に関する重要事象等

当社は、2020年2月期から2022年2月期の3期にわたり、営業損失、経常損失及び当期純損失を計上いたしました。また、2022年2月期においては、期末日現在の現金及び現金同等物は前事業年度末に比べて増加したものの、営業キャッシュ・フローは2期連続でマイナスとなりました。2023年2月期の業績見通しは、営業損失90百万円、経常損失99百万円及び当期純損失112百万円を見込んでおり、2022年2月期に比べて大幅に改善するものの、4期連続で営業損失、経常損失及び当期純損失を計上、また3期連続で営業キャッシュ・フローがマイナスとなる見込みです。一方で、当第3四半期会計期間末の現金及び預金は1,398百万円であり、事業推進、研究開発活動及び経営施策の実行等に必要な運転資金の他、設備投資及び借入金の返済等に必要な資金も十分に確保していることから、事業継続に支障はないと判断しています。

これらの状況から、2021年2月期末以降、継続企業の前提に重要な疑義を生じさせる事象又は状況が存在していると認識していますが、財政面では、事業計画で予定する当面の支出を充たす手元資金を有しており、また、当該事象を解消または改善する以下の施策を実行することで、引き続き、継続企業の前提に関する重要な不確実性は認められないと判断しています。

① コンサルティング事業の堅調な推移

2023年2月期におけるコンサルティング事業の売上高は2,466百万円を見込んでいます。前期からコンサルティングサービスの強い引き合いが継続しており、受注が堅調に推移しています。今後も、さらなる需要増加に対応するために、即戦力となる中途採用者の採用強化とパートナー企業の増加に取り組んでいくとともに、新卒採用者や未経験者の育成にも強力に取り組み、旺盛な需要を取り込んでいく方針です。

② ワンダーレジ-BOOK、EZレジの拡販

2022年2月期に、書籍販売に特化した「ワンダーレジ-BOOK」とシンプルな機能と構成で低価格化を実現したコンパクトPOSセルフレジ「EZレジ」の販売を開始しました。

ワンダーレジ-BOOKは書籍特有のバーコードに対応し、さらに一度に複数の商品を読み取れること等が従来の書店向けセルフレジには無い機能として注目されています。書店チェーンの株式会社大垣書店のイオンモールKYOTO店において2022年3月から実施していた試験導入では、目標を上回る利用率や効率化を実現、また同社のニーズに合わせた機能の開発も順調に進捗しています。これらを受け、2022年10月、実証実験として設置していたワンダーレジ-BOOKが大垣書店イオンモールKYOTO店において正式採用されることとなりました。今後も、顧客ニーズに沿った製品の改良と機能開発に取り組み、販売増加に取り組んでいく方針です。

EZレジは簡易なPOS機能を搭載しながらも、設計や機能を工夫して低廉な価格を実現したセルフレジです。価格と使いやすさが評価され、学校や病院内の売店のほか、24時間無人営業の古着販売店に導入されるなどしており、期初より堅調に販売台数を伸ばしています。また、フランチャイザーが提供するセルフレジ化ツールとしての検証が進められるなどしており、これら拡販の機会を受注につなげられるよう営業活動を行っています。